

地域の豊かさを考える

——「国際演劇祭」と
「そば祭り」・利賀村のこころみ——

田村 孝子

たむらたかこ

(財)砂防・地すべり技術センター評議員
静岡県コンベンションアーツ
グランシップ館長

新緑の季節になると毎年、緑色ってこんなにもたくさん色があったのかと都会に住んでいても自然の力を実感し、元気になります。まして、以前大型連休中に訪れた時、いつも見るのとは全く違うチューリップの鮮やかさに驚かされた富山県・利賀村では、今どんな緑が見られるのだろう、さぞさわやかな空気が流れていることだろうといつもなつかしく思い起こすのです。

そもそも私が、現在のグランシップでのお仕事をお引き受けするようになったきっかけは、1976年から利賀村を拠点に演劇活動をされてきた演出家の鈴木忠志さんとの出会いがあったからです。利賀から活動の拠点を静岡に移された年に、NHKで音楽番組を担当していた私は解説委員室への異動を命ぜられたのです。日本全国「はこもの行政」といわれることの多かった公立の文化施設でしたが、利賀では利賀芸術公園で劇団「SCOT」を、静岡では日本平の静岡舞台芸術公園の

県立劇場で劇団「SPAC」を率いて先進的な創造活動をされていた鈴木忠志さんに、芸術家としての姿勢の大切さを教えていただいたのです。同時に、静岡県の文化政策の先進性にも注目するようになりました。つまり劇場という箱だけでなく、そこで提供される舞台芸術創造のための劇団と制作スタッフを持ち、人事権、予算権を持つ芸術総監督が運営する体制をつくったのです。ちょうど公立文化施設のあり方が問われてきた10年余でしたので、芸術・文化の解説委員として、静岡の文化政策・文化行政については注目し、継続して取材もしてきました。ところが、その意義を当の静岡の方々を理解し、受け入れているかを少々疑問に思っていたというのが正直なところでした。私が静岡での仕事をお引き受けしたのもそうですが、たぶん鈴木さんの後を継がれて、「SPAC」の芸術総監督を引き受けられた演出家・宮城 聡さんも静岡県がとった文化政策・文化行政が実ることを望まれたからだと思うのです。そんな出会いがあって、私は利賀へ足を運ぶようになったのです。

実は利賀芸術公園は、過疎に悩む利賀村が地域の活性化を目指して、合掌造りの家屋をまとめて移設し、1973年に『利賀合掌文化村』を設置したのが始まりです。これを紹介された鈴木忠志さんが、1976年『早稲田小劇場』とともにここに演劇活動の拠点を移し、後に劇団『SCOT』を立ち上げたのです。ここには、合掌造りを改造した劇場『利賀山房』『新利賀山房』、ギリシャ風の『野外劇場』など、建築家 磯崎 新さんの設計による施設が次々に建てられました。そして1982年から世界演劇祭「利賀フェスティバル」が始まり、世界から注目さ



イラスト：仲野順子

れる演劇の拠点になったのです。村の方々は「自分たちは作品をよく分かっているわけではないが、鈴木さんが白石加代子さんや他の俳優さん達を指導されている様子を見て（スズキ・メソッドによる俳優訓練法）、これは本物にちがいないと思った」と笑いながら話されていたのを思い出します。夏の野外劇場で「世界の果てからこんにちを」を観たとき、私の隣にお孫さんを連れてきたおばあさまがいらしたのですが、小学生の男の子はしだいに飽きてきた様子でした。でもその時おばあさまはお孫さんを抱き上げ、「もう少し待ってごらん、今に花火が上がるから……」。この作品は、途中で打ち上げ花火が次々に上げられる話題の作品なものでした。舞台の後ろは池、その向こうは川と山、客席の後ろもまた山というロケーションです。真っ暗な夜空には都会で見るとは全くちがう星空、でも懐中電灯がないと歩けない、そんな場所だから出来る演出なのです。男の子にとって、おばあさまと観た演劇の思い出は一生心に残るにちがいないというらやましく思ったものです。

現 在この利賀村芸術公園は利賀村だけでは支援できず、富山県の施設となっています。「利賀フェスティバル」もいったん終了し、あらたにアマチュアからプロにいたるまで、演劇を目指す人材の育成の場としてスタートしています。簡単に勝手に帰宅できてしまう都会とはまったく異なり、夜になると星空以外に何も無いのは今も同じです。この夏から再び劇団「SCOT」の活動が始まります。ここでしか得られない豊かさは、貴重ではないでしょうか？ 演劇祭がきっかけでギリシャのデルフィと姉妹都市となり、村の中学校の修学旅行先は今もギリシャです。

た だ、私が最初に利賀を訪れたのは演劇祭ではなく、今から10年前、真冬の2月に開かれた「利賀そば祭り」です。昔は積雪5メートルといわれた地域で、いったいどんな状態なのかと不安だったのは確かでしたが、スキー場と同じと思い直して富山空港に降り立ったのでした。しかし、空港付近の幹線道路が整備されているのは当然としても、利賀村に近づき道の両側が雪の壁になっているところでも、車の通る幹線道路に全く雪はなかったのです。「道路の整備も含めて、融雪装置がなかったらここは陸の孤島になってしまい、誰も住めなくなるのです」と話してくださった村長さんの言葉は忘れられません。人口800人の利賀村へ、真冬に3万人の人が訪れるのです。夜になると、道に沿った雪壁の穴には、ろうそくが灯されていました。

そ ば祭り」は、世界演劇祭以外でも何か地域を活性化できることはないかと考えたのがきっかけだったのですが、ヒントは日本のそばの花は白いが、ネパールのツクチェ村に咲くそばの花は赤いと聞いたのが始まりだそうです。当時の宮崎村長以下利賀村の一行が初めてネパールのツクチェ村へ行ったのが1989年1月、このときの出会いがきっかけで利賀村には、ツクチェ村の曼荼羅師が描いた4メートル四方の曼荼羅・仏教絵画四面のある「瞑想の館」と15世紀の曼荼羅の復元を目指した「瞑想美の館」ができました。日本・ネパール国交樹立40周年記念の年、1996年にはネパールのカトマンズで「利賀・ツクチェむらおこし交流展」が開かれました。日本とネパールの山間の過疎の村が抱える問題を話し合い、日本の無償資金と技術協力、そして利賀村からのトラクター

などの支援で、二つの川が合流する扇状地にあるツクチェ村の防災計画が実施されるようになったのです。

1 998年私が初めてツクチェ村を訪れたときに、護岸工事の完成式に立ち会いましたが、水制工の背後に土砂が堆積し、侵食された土地が復活し、柳などの若木が育っていました。当時、ツクチェ村への交通手段はポカラから軽飛行機でジョムスンまで8000メートルの山の間を飛んで、あとは馬で行くか徒歩で4時間もかかったのです。石の運搬のためのトラクターはなによりだったにちがいません。また利賀川の護岸工事は、ツクチェ村の人々に指導によって、ネパールの石積みを利用して行われました。その一帯は現在は砂防記念公園となっており、工事に携わったネパールの人々の名前が刻まれています。

今 年は利賀村がツクチェ村と交流を始めて20年になります。ツクチェへの街道は今でも人気のトレッキング地帯だそうです。オートバイやトラクターが往き来する道にもなりました。収穫物を運搬する手段ができたわけで、旅行者に人気の飲み物となる沙棘（サジー）がさかんに作られています。交流の初期から利賀村が受け入れてきた研修生たちが、日本での成果を生かし、村の生活は豊かになってきています。10年前はカメラすらなかったのに、今ではパソコンもあるそうです。チベット難民の問題、ネパールの政情転換の時期をむかえ、今後のツクチェ村にどんな影響があるのでしょうか？ 利賀村の方々はこの秋、馬と徒歩とでツクチェ村を訪れる予定だそうです。